

漱石全集

第一卷

漱石全集
第一卷

吾輩は猫である

昭和四十年十二月九日 第一刷發行
昭和四十九年十二月九日 第二刷發行

漱石全集 第一卷 吾輩は猫である

定價 二千八百圓

著 者

夏 目 漱 石

發 行 者

岩 波 雄 二 郎



發 行 所

株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

目次

吾輩は猫である

三

解説

五三九

注解

五六一

吾輩は猫である

明治三八、一、一——三九、八、一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめくした所でニャーく泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中で一番癡惡な種族であつた。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考もなかつたから別段恐いとは思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフバ／＼した感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間といふものの見始であらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつる／＼して丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會はした事がない。加之顔の眞中が餘りに突起して居る。そうして其穴の中から時々ふう／＼と烟を吹く。どうも咽せばくて實に弱つた。是が人間の飲む烟草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つて居ると、どきりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が付いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑いと、のそく這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向ふに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫くして泣いたら書生が又迎に來てくれるかと考へ付いた。

ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も來ない。其内池の上をさらりと風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度でも聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をしてそろり／＼と池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に

至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。猪邸へは忍び込んだものの、是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でもう一刻も猶豫が出来なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かきうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つて居つたのだ。こゝで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せ居た。然しひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上つた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上り、這ひ上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつくづくいやになつた。此間おさんの三馬を偷んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出され様としたときに、此家の主人が騒々しい何だといひながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて此宿なしの小猫がいくら出してても御臺所へ上つて来て困りますといふ。主人は鼻の下の黒い毛を捻りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまゝ奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を聞かぬ人に見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入ったきり殆んど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寐をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寐て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで彼は友達が來る度に何とかゝんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつてくれないでも分る。吾輩は仕方がないから、出來得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつめた。朝主人が新聞を讀むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寐をするときは必ず其脊中に乗る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが別に構ひ手がなかつたから已を得るのである。其後色々經驗の

上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は椽側へ寐る事とした。然し一番心持の好いのは夜に入つてこのうちの小供の寐床へもぐり込んで一所にねる事である。此小供といふのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寐る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。小供は——殊に小さい方が質がわるい——猫が來たくといつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經衰弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て杯は物指で尻べたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等是我儘なものと斷言せざるを得ない様になつた。殊に吾輩が時々同衾する小供の如きに至つては言語同斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しを仕様ものなら家内總がゝりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸疊で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君杯は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の様な子猫を四足産まれたのである。所がその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四足ながら棄てゝ來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛

を完くして美しい家族的の生活をするには人間と戦つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤の議論と思ふ。又隣りの三毛君杯は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大に憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鯔の臍でも一番先に見付たものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へて善い位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて我等が見付た御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其強力を頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて濟して居る。白君は軍人の家に居り三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日／＼が何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮へる事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をし様。元來此主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほとゝぎすへ投書をしたり、新體詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはヴィオリン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張是は平の宗盛にて候を繰返して居る。皆んながそら宗

盛大と吹き出す位である。此主人がどういふ考になつたものか吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあはたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと水彩繪具と毛筆とワットマンといふ紙で今日から謠や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日々々書齋で晝寐もしないで繪許いかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。常人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に下の様な話をして居るのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見るところでもない様だが自ら筆をとつて見ると今更の様に六づかしく感ずる」是は主人の述懐である。成程詐りのない處だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像許りで畫がかける譯のものではない。昔し以太利の大家アンドレア、デル、サルトが言つた事がある。畫をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は一幅の大活畫なりと。どうだ君も晝らしい畫をかうと思ふならちと寫生をしたら」

「へえアンドレア、デル、サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲ける様な笑が見えた。其翌日吾輩は例の如く椽側に出て心持善く晝寐をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て吾輩

の後ろで何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分計り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア、デル、サルトを極め込んで居る。吾輩は此有様を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲擲せられたる結果として先づ手初めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寐た。欠伸がしたくて堪らない。然し切角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思ふて、ぢつと辛棒して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。脊といひ毛並といひ顔の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある様な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、去ればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寐て居る所を寫生したのでから無理もないが眼らしい所さへ見えないから盲猫だか寐て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア、デル、サルトでも是では仕様がなと思つた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度と思つたが、先つきから小便が催ふして居る。身内の筋肉はむづ／＼する。最早一分も猶豫が出来ぬ仕儀となつたから、不得已

失敬して兩足を前へ存分^{ぜんぶん}のして、首を低く押し出してあゝと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の豫定は打ち壊はしたのだから、序に裏へ行つて用を足さうと思つてのそゝ這ひ出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜた様な聲をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に惡口の言ひ様を知らないのだから仕方がないが、今迄辛棒した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼はりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の脊中へ乗る時に少しは好い顔でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じて皆んな増長して居る。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくては此先どこ迄増長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが吾輩は人間の不徳について是よりも數倍悲しむべき報道を耳にした事があ

る。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。廣くはないが瀟洒とした心持ち好く日の當る所だ。うちの小供があまり騒いで樂々晝寐の出来ない時や、餘り退屈で腹加減のよくない折扨は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は晝飯後快よく一睡した後、運動かたゝこの茶園へと歩を運はした。茶の木を一本ゝ嗅ぎながら、西側の杉垣の

そばまでくると、桔菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覺に寐て居る。彼は吾輩の近付くのも一向心付かざる如く、又心付くも無頓着なる如く、大きな麝をして長々と體を横へて眠つて居る。他の庭内に忍び入りのものが斯く迄平氣に睡られるものと、吾輩は竊かに其大膽なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黑猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きら／＼する柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる様に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる體格を有して居る。吾輩の倍は慥にある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して餘念もなく眺めて居ると、靜かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばら／＼と二三枚の葉が桔菊の茂みに落ちた。大王はくわつと其眞丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀といふものよりも遙かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。双眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえは一體何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろ其聲の底に犬をも挫しぐべき力が籠つて居るので吾輩は少なからず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと險呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべくへき可成平氣を装つて冷然と答へた。然し此時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居つた。彼は大に輕蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。全てえ何こに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事だらうと思つた。いやに瘡てるぢやね